研究活動報告 子育て支援プログラム活動報告

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>池内 まり</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>153-155</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>2012-02-29</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>URL <a href="http://doi.org/10.14990/00002741">http://doi.org/10.14990/00002741</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
子育て支援プログラム活動報告

子育て支援プログラムは、人間科学研究所と心理臨床カウンセラーガループが共同で実施している活動である。このプログラムでは、子育て支援者が子育て支援が必要な親子を対象に、体験的な活動を通じて支援を提供している。

プログラムの立ち上げは、平成三年に始まり、現在では、学童期までの支援を対象としており、地域のニーズに応じて活動内容が変更されている。

子育て支援者は、地域の子育て支援のニーズに応じて、活動内容を変更している。特に、子育て支援の必要性を感じられた地域では、支援者が直接的な支援を行い、子育ての支援を提供している。

子育て支援者は、親子相談を主な活動内容としており、親子相談の必要性を理解し、相談する親子の支援が必要であると考えている。

親子相談の内容は、子育てに関する質問や心の悩み、子育て支援の必要性についての相談などである。親子相談は、地域のニーズに応じて、活動内容を変更している。

「親子相談」では、子育ての悩みを解決するために、子育て支援者が直接相談を提供している。親子相談の内容は、子育て支援の必要性や、子育て支援の提供方法についての相談などである。

「子育て支援活動」では、子育て支援者が直接的な支援を行い、子育ての支援を提供している。子育て支援者は、親子相談の必要性を理解し、相談する親子の支援が必要であると考えている。

「子育て支援活動」では、親子相談の必要性を理解し、相談する親子の支援が必要であると考えている。子育て支援者は、親子相談の必要性を理解し、相談する親子の支援が必要であると考えている。

「子育て支援活動」では、親子相談の必要性を理解し、相談する親子の支援が必要であると考えている。子育て支援者は、親子相談の必要性を理解し、相談する親子の支援が必要であると考えている。
交流の機会を提供することを目指した親子の遊びの教室である。活動日は毎月第二・第四火曜日の午前中で、年間三十三回開催している。プログラムは、保育士による設定遊びで、参加者の大半が継続参加されるため、幅広い遊びを提供できるよう心がけている。参加者の年齢層は幼児から四歳と幅があり、それぞれの発達段階での楽しみ方を提供することにも配慮している。今年は、これまでの実績に基づくプログラム内容の充実や、スタッフの丁寧な指導によるところが大きいのはもちろんです。個が尊重される集団という乳幼児親子のニードと、「うりぼうくん」にはあり、昨今の自閉症・社会にあって、「うりぼうくん」の魅力が感じられるグループである。

子育てサークルに参加する親子が、それぞれ親グループ、子どもグループに分かれて過ごす活動で、全五回のプログラムを年間二クール実施している。子育てサークルに参加する親子が、それぞれ親グループ、子どもグループに分かれて過ごす活動で、全五回のプログラムを年間二クール実施している。

子育てサークルに参加する親子が、それぞれ親グループ、子どもグループに分かれて過ごす活動で、全五回のプログラムを年間二クール実施している。

檜田美美先生のご指導のもとアート体験に取り組んだところ、子ども主体の日常において埋没する自己の表現を楽しむ感情が一層強まってきた。活動後、子どもたちの元気で活気ある様子が見られた。今後の活動においても、子どもたちの表現を尊重し、自分の感情を表現する機会を提供することを心掛けていきたいと考えている。
研究活動報告

つほくくりプレイグループとくらり・卒業生のフォローアップグループは小学校親子を対象にしており、夏休みと冬休みを利用して年に二回開催している。今年は参加者が減る減少していたものの、思春期の子どもへの対応に苦慮される親の思いや、もどかしいエネルギーに翻弄される子どもたちの姿があり、日常の親子の葛藤が垣間見られた。幼少期に育てにくさを感じていた親子も少なくなく、半年に一回ではあるが、自身の気持ちを振り出し共有する時間のひとつ意味は大きいと感じている。今年は、三月の大震災や原発事故、夏の台風という大きな災害に見舞われ、至るところ深い悲しみに覆われた。それと同時に、人と人とのつながりを実感することの多い一年でもあった。

家族の大切さを感じた人の多さを象徴するように、平成二十三年を表す漢字には「絆一」が選ばれた。人とのつながりは、時に支える網となって縛る網になったりもする。子育て支援プログラムでは、人を支え関係を育む「絆一」とはどのようにものであるのか、それぞれに特色のある活動を通して今後も考えていきたい。

末筆ながら、今も苦しみや不安の中で過ごしている皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

（池内まり）